俳

中村俊定文庫
文庫 18
239

神戸氏

小岡は梅きもの出家者さ[illegible]
徳の友ちはそんより酒肴を持参た
多しきへおち暁乃ちれくし起き
やゆれ笠のかしへ川原出途の足袋ら
及ぶは所者十四日より旅行者
といつまちさんの江の高者宿帳より
かう鎌倉はかりかと箕人より伝えられ
曜馬よりめを通てみるに月千里は
情を寄ふるまよ某ぬされ世さるのの

おやはさるよ翌日ちいさいとうを見雨も
旅たりまさ孫と[illegible]孫あいあるいとさ
あるよ[illegible]ちよひうれて宗井を
使しまたての用意をたるよ笠一蓋
吉野見し拾本笠あいあるて六浦や
ちもし萩ゆ笠ちもむ

半路觀園斎

四友餘芳

[illegible]生ゆ[illegible]あるうへ切口を[illegible]
[illegible]れて翌日ち鎌倉へ[illegible]
[illegible]ん世[illegible]捨し[illegible]
ちち名[illegible]

寅門

ゆをはさ出るよいちゃし鍋牛
箕人暗る茅井[illegible]の白言を求め
ゆよ園弁へ鍋をたの世

餘平

ち東ふ中やかいたのらたいもの

今日送る須原鮮
明朝相懐路漫と

寸長

[illegible]あるいを[illegible]
[illegible]ちをいむ

澗里

[illegible]ちちて料理し鍋ゆ

芳遠

紫ぬいをとむあやめ草　国郁

火の玉もゆる五月雨の頃　寅門

家鳩よ淀ぬ窓中ちゆく　鮮平

帰京の船ちらをまて

一書に湯むらなる

ちいさいかくれて

やうを

五月十六日晴なれど空那ゝあるかの無

れと東ちゝむを打羅漢江府を立て

友笠ぬ掛ゝて蛙しきりに　蓑人

飯倉ぬ御社よりてゝまを御燈ゝ行に

のゝりゝいと高くゝ

白鷺ぬ幣帛しかるや皐月雨　曙馬

芝舟江氏山上一亭を訪て画像菊一幅よ

伸を拭ゝ為ゝ事

下蔭乃あゝ

ゝ栗ぬ花　国斎

鈴森のかたより池と書いたる田面を眺て詠
吹ふけて塔を見るに早苗哉　蓑人

海辺

已り身もおちれたる濡衣て刈藻ふ　曜馬

六郎のはかなきなる茶店よりて煙草やすめ
夏よい屏風あり花をかきなをせ
うくの短冊をうらうらいに新の知意なる
いれの白なりかさりに枯木花雪よ屋長かける
の松賛して

峠を海辺さんむ雪中春枝　茶井
物をいひ川停よりて雨ちのうち海辺
無いきてさいなる浦子安一義茶也

蓑人亭

いなる日高ふれもの面をまとはやまとの岩
うしなる所ふ楽しるいはくるよまるて
夏ようなりぬるは窓意ちさしやホ石の
かもうる庭の高と大達一万寿賞ふ
宜なる茶あり仏なりてはぬるまて屋

終日は雨を聞くとうるさく

初数声は夏山ふかし　杉の郭　圓齋

あれやそれを合点の殿たくさま　菊井

半夜松をおりくてて

蚊も出ぬよ夢とやぬるや納涼の郭　曙馬

雲の音信り来れさう月雲深しさ山く

ぬれなるみそれのれよぬれてそ只よ東部の

化んのこゆうしと待しにたのもあるる誘ひ

て茅屋へそそえしに拙の高

を切しそやいそむ

入梅時てさし入月は嬉しさよ　蓑人

有明のかれに おくらるる あををぬ 弥京川

ふいそそ

海雲ぬさや切れ蛍う独の浦　曙馬

汗ばりよ新そら俗の笑う蘇　蓑人

海岸遠景かそ墨うほそ

海雲

舟たそる燈のすそ傍やそ空　圓志

武蔵相模の境竹堂の地蔵を安置

境木の角のたちあやかりあり　曜月

一山行書一山青　新たといつまて雨よりは

土蛍行きもたにたてはは俗の暑し

帽子を落す日も富士は雪哉　忠雄

夏と石こち五寸ほとあれ　箕人

藤沢の御所

出女の製たり墨のにおひまの　昭馬

鶏鳴の宿をもるれの富士の八てはたち

なる山よりあれ松の花咲て

松の花咲るれとうりあり雪　園元

石長流

舟をうり白しさうきの川の色　箕人

江若岩

海士の風多み浦しるく舟若て波辺行うの

許よ八てやうしあるより打ひれ本宮の宝ま

ホ詣りみ志の日の比やうのあるよいと御影の

ちくしも各さうく法と地ほ法

うさぎ山れをわけて新し岩根哉　園舟

南くとよ岩も和くや苔の花　箕人

沖頃や藻を刈舟の朝日哉　曜馬

材木や拾て寄るの志ほ哉　巴江

ぬれ衣や塩干の磯の松の魚　蓼子

新たのむ蛇塚を過根川南　菓井

演乃　二句

擂鉢をうつさ七里ヶ浜よりあるく磯よあゆるくち

ひのもの寄るい蒸布乃根とかしきうあり

くてあ[illegible]とくとさうえんとうて

寄せ寄よさかくめうあり白ひう鉢　園舟

紫陽花やちんてうの波の先き　丶

極楽寺

礎や[illegible]むし百合の花　曜馬

坂なのつまて寄あうちをて江ぬて見

なるめるほくこのうぬ

南風や懸ろうあれうあり　壺天

ぶうとわたるや寄よ鞍ととて桑おちちのの

落てもすゝ鄙は流るゝいとむ
むとゝる藜や牛のまりた　箕人

生乃井

河佛のむらを打もしめのハをゝむ
山深は花い根もなき落し　園舟

長谷寺大佛を見ふたりもゝ山あふさゝ谷
のゝふぬ　暁る

巻杉よ八日ふるてゝるゝ　暁る

雪下よ河　頃内殺生禁断

鎧ゝや雲もゝゝ鎧ゝ　茶井
谷くゝよ巻所りれし沖ゝ　箕人

四跡の数ゝよ蒔ゝ一字を味ゝて
古いゝ寺社のゝや活かゝ　園舟

暁ゝ岡ゝゝゝゝ雪ゝを出れ
明やゝゝゝよ柳よ此敬ゝ　暁る
楊梅よ社家の飯乃ゝゝ　箕人

松ゝ器

石蕗や利毛ゝ池松ゝ器　茶井

建長寺

丹青も空しくて苔鮮ハ画かなし
釣鐘乃下ハはあさし苔みどれ　圖秋

荏柄天神

いさゝよすゞみて涼し梅の神　暁る
一節におもむや江の梅まえし　篁人
まつ梅や人もさうぼよ有かくき　圖洲

杉本寺

坂東順礼札所一番

ちり深のしふ那ハるり杉の本　昭馬

一口よあさしれ家あり句つく妻のもかなし
おもしろくおりきとさし眼あくさるる人なし
出る水車の御みそ

圖穂日れ當るに合点ぬ水車　篁人

なめり川を渡るとて

藻丸なや銭みてなくしゆるの庭　圖春

切通しを過ぐるに切岸乃志をより清ふ滴
をとつけ蕪荻かのてのきよきくてたりしきり
好味の蔓生さりて京に行きゝふ

笠の陽を拾て暫らくいたらん程　曙馬

瀬戸明神

志ほらあや衣表を潜らしを煙　蓑人

金沙よ志りくやしらくもの小舟ものの雲海

あらし塩ちんなとおのくひしめくを石興江も

風の音波ぞちらめそ又やまんそ有なく

も山ふよちの乃ちら

能見堂

海山をうまよ百てうるあまき弐　蓑さん

夢れた八つの日さしの此蔵をかな　茶井

ふれよりおとうやへ出る山路茅て行あるも

仙ちう路只かなしさ海あるあるあるを京此の

かりいあるとく四里余此行程いとく長く苦

て毒雑あもてをを毛をうなる事也

篠弁ををおるやかる此蝿をを　蓑弁

芭蕉の葉よいよくとをを山路ぶ　蓑人

海墓よ弁志川の袋こいるる

はしををて新も絵も史新弁　曙馬

ゆふくれ篆人亭におよまれ

觀深亭

今沢の人にきく月をとこそ飾り　茶井

同しさめてもみかはいかなる時なる

縁引の沖よりおこるや詠めしの　曜馬

觀瀾亭眺望辞　掃貝庵

海篆人子榮園竹径を隔し呂の山に一亭
を補理ふ名はあて觀深とよく字言ふ
ゆゑに謂に蒼海一望風洞同前に満て
之むかしより東に寺ありちかきに鐘磬
をまかせて林鐘の驛路乃鈴を不聞耳
北は海しかしを田面に落雁に軒懐る月に
清く心なるもかしきりてあれや西は本牧
十二天連りて六浦うみに續く白雲の

花かつのの杉たるを神奈川潟の網ちかすみ
の名ならてはいとなつかしき地なりけり小舟を岸に
たてるうさく杉柄の細くなるまに晴寒かい
つれの紐ゆ詠へしむ海の夕雪はあるとも鶯の
言信ものもはりあれてはりて南を薫風自
来り渺々たる鎌倉彼方紫い潮なる仏の浦帆い
あらふるおかし地引網小鯨は花の上潜るを
見もかくやと思ふ風情なる神浦の
海士は呼ぶ麦村の麦搗唄いつ秋風流なる

波といふ中なし夏よりやむ主人の雅世は
蒼い磯を曲りて菅仲乃ふれしふ春景
眼を浸ふ

杉流る蝿は杉清や蒼小舟　園斎
客ヲ留ル　楊梅ノ軒　簑人
汲て知る千石の醤油ふれうて　茶井
ちよもいかもの車引むし　巴江
掃除さへ夕月の搗蕎清　曜馬
手を合て角力をする　燕子

今一枝とうもれたる
雪の色は秋のあけぼの　篠人
いとゆかしき
宮ぎや跡引ぬ波みなと　国秀
冷泉の山松ぶるを見て歌ん　栄井
博見市場のあけぼのにて
おのゝ見しうつ波へ
ゝ国植ゆる　国さん

元文二丁巳歳皐月

浦秋來之
正登五

中村文庫